



TITLE:

セルジューク朝と後期ガズナ朝 - その國境地帯について -

AUTHOR(S):

稲葉, 穰

CITATION:

稲葉, 穰. セルジューク朝と後期ガズナ朝 - その國境地帯について -. 東方學報 1990, 62: 637-673

ISSUE DATE:

1990-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/66702>

RIGHT:

セルジューク朝と後期ガズナ朝

—その國境地帯について—

稲 葉 稷

はじめに……………六三七頁

一 ダンダーナカーン以後の兩王朝の

政治的關係……………六三九頁

1 マウドウード時代

2 アブド・アッラシード、トゥグリル、

ファッルフザード時代

3 和平とそれ以後

4 サンジャル時代

二 北方の状況……………六四五頁

1 四六五／一〇七二—一〇七三年までの状況

——HYBAN/Hupyan と Sakaland

2 バルフ、トハリスターンの混亂

——四六五—九一／一〇七二—九八

三 南方の状況……………六六〇頁

1 ブストについて

2 スイースターンの内紛と兩王朝

むすびにかえて……………六六六頁

はじめに

ヒジュラ暦四三一／西暦一〇四〇年(以下同)、ガズナ朝はダンダーナカーンにおいて、トゥグリル・ベク Tughril Bek、チャグリ・ベク Chagri Bek に率いられたセルジューク軍に敗北し、その西方領土ホラーサーンを失った。以後、五一〇／一一一七年にセルジューク朝のサンジャル Sanjar によってガズナが征服されるまでの約八十年の間、少なくとも表

面的には、兩王朝の間に一種の勢力均衡状態が現出されていたかに見える。しかしながらそのような勢力均衡が様々な要素の上に成り立っていたものであることは想像に難くない。本稿はこの八十年間の兩王朝の關係を考えようとするものである。一般に二つの王朝の關係を考える際、先ず問題になるのはその國境地帯^①であろう。兩者の國境地帯が何時頃どの邊りにあったのか、それが如何なる事情によりどの様に變動したのか。それらを考えることによって、兩王朝の關係のみならずその時代の政治史全般にも新たな角度から光を照射することもできるのではなからうか。ところでこの八十年間の全體的な政治史については既にボズワース C.E. Bosworth が二度にわたってかなり詳しく述べており [Bosworth 1968a; *idem*. 1977]、兩王朝の關係もそれらの中である程度検討されている。只、一方は概説的、網羅的色彩が濃く、もう一方は記述の中心を後期ガズナ朝の政治史に置いているために、國境地帯を巡る兩王朝の事情や動き、あるいは地理的な問題が十分に述べられていないうらみがある。そこで本論では特に兩王朝の國境地帯の状況の變化と政治史の關係に論點を絞って考えてみたい。それによって、不明な點の多いこの時代のホラーサーン、アフガニスタンの歴史、地理的狀況を幾分なりとも解明し、併せて次の時代、すなわちサンジャルによる大セルジューク朝の復興、グル朝、ホラズムシャー朝の臺頭等による、ホラーサーン、アフガニスタンの新たな激動の時代が如何なるバックグラウンドから生み出されたのかを理解する一助としたい。

具體的には先ずこの八十年間に兩王朝の間に生じた事件を *al-Kāmil fī al-Tārikh Akhbār al-Dawla al-Saljuqiya Tabaqāt-i Nāsiri* 等の史料の記述^②から抜きだして年表形式に表わし、そこから引き出される問題を検討するという手順で論を進めていく。

一 ダンダーナカーン以後の兩王朝の政治的關係

さしあたってこの年表より明らかになることは次の二つである。第一に兩王朝の關係が四六五／一〇七二—七三年を挟んでおおきく二つの時期、すなわち交戦期と不戦期に分かれるということ。第二に兩王朝の主戦場が北はトハリスターン、南はブスト、スイースターンであったということ、である。本章は先ず第一の點について述べる。

右で述べた二つの時期はさらに各々二つずつに分けられる。すなわち四六五／一〇七二—七三年以前についてはマウドゥード Mawdud 治世とそれ以後、四六五／一〇七二—七三年以後についてはサンジャルがホラーサーンの malik となる前と後である。個々の事件については先に述べたボズワースの研究があり、また幾つかについては後で詳しく觸れるので、ここでは順に各々の時期の政治状況の概略を見ておくにとどめる。

1 マウドゥード時代

ダンダーナカーンから逃げ戻ったマスウード Mas'ud はセルジューク朝に對する手配りとして軍をブストへ派遣し、セルジュークの包圍にあつて孤立したバルフへの援軍として先ずハージブの Altuntash と千騎を送る⁽³⁾ [TB:869-71, 877]。その後 Altuntash 軍の敗北の報を受け、王子マウドゥード Mawdud を司令官とする大軍團を編成して HYBAN へ向かわせ、自身はヒンドウースターンに向かったが、途上、兄弟 Muhammad を擁する配下の反亂に遭い、死去した。マウドゥードは HYBAN よりガズナに戻り、叔父 Muhammad の軍を撃退し即位した [ibid.: 882-91; ZA:204-06]。彼は即位後、離反したスイースターンに對して軍を送ったことを手始めに、セルジューク朝に對して積極的な軍事行動を繰り廣

表1 ガズナ朝とセルジューク朝の関係年表 (431/1040-510/1117)

年 (ヒジュラ 暦/西暦)	Ghazna 朝の君主達	Balkh, Tūkhā. の統治者	北	南	Sistān の 統治者 (Slj.)
431/1039-40	Mas'ūd	Chaghri Bek	・ダンダーナカーンの戦い: ガズナ軍の完敗		Bayghū & Ertāsh
			◆バルフ救援のため Tūkhāristān 方面 へ一千騎の軍派遣	◆Nūshtekīn-i Nawbatī をブストに派 遣	
			◆王子マウドゥード率いる大軍勢を HYBAN に	◆Abū Sahl-i Zawzani をブストに派 遣	
432/1040-41	Mawdūd		*★バルフ陥落	◆スィースターン派兵→敗北	
433/1041-42				◆スィースターン派兵→セルジューク の Ertāsh の軍に敗北	
434/1042-43			◆Tūkhāristān 派兵, バルフ一時奪還	◆ハージブ Tughril, スィースターン攻 撃→Abū al-Faql と一旦和す	
435/1044-45			*★Tirmidh 陥落(?) *★ヘラート陥落(?) ◆Tūkhāristān 派兵→Alp Arslān に より撃退される		
437/1045-46				★Ertāsh 軍スィースターンからガズナ 目指して北上→ガズナ軍に敗退	
440/1048-49	Mas'ūd, 'Alī 'Abd al-Rashid		◆對セルジューク大同盟 →カラ・ハン朝, イスファハーンの Abū Kalijār 等と		
442-43(?)/ 1050-51			★セルジュークの攻勢		
443 Rajab/ 1051. 11			★Alp Arslān, Tūkhāristān から南下 →HYBAN の戦い	★Chaghri Bek ブストより北上 ◆Tughril スィースターンを攻撃	
Sh'a/52. 1	Tughril				
443 Dh. Q(?) /1052. 3(?)	Farrukhzād		★ハージブ Khirikhiz, Chaghri 軍を撃 退 [IA]	★Nūshtekīn, セルジューク軍をブスト で撃退 [Hs]	
			◆ガズナ軍ホラーサーンへ→Chaghri (Alp Arslān) 軍を破る Chaghri (Alp Arslān) の反撃→兩軍捕虜交換 →和議への動き?		Chaghri Bek

451 Šaf./ 1059.4	Ibrāhīm				
452/1060-61 (455/1063)		Alp Arslān		◆★Ibrāhīm と Chaghri の間に和平協定締結	
456/1063-64		↑ ?			
458/1065-66		Sulaymān(B)		◆★Arslānshāh b. Alp Arslān と Ibrāhīm の娘結婚	
		Ilyās(T)			
465/1072/73		Ayāz(B)	◆Ibrāhīm, Sakalkand 出兵 ▼カラ・ハン朝 Tirmidh 奪取		
467/1074-75 (?)		Tekish(B)		◆★Mas'ūd b. Ibrāhīm と Malikshāh の娘の婚儀	
477/1084-85		Aḥmad(B)			
481/1088-89	Mas'ūd				
486/1093-94		Arslān Arghūn			
490/1096-97		Muḥammad	◆Muḥammad b. Slaymān 反亂←ガズ ナ朝援助		
		Dawlatshāh(T)			
491/1097-98		Sanjar			
495/1101-02			▼Qadir Khān ホラーサーン侵攻		
508/1114-15	Malik Arslān			★サンジャル, スィースターンを制す ★サンジャル, ブストへ派兵 →ガズナ軍の勝利 ★サンジャルの親征→ブストからガズ ナ ★サンジャルのガズナ征服	
510/1116-17					
Shawwāl 20 /1117.2.25					

Bayghū

?

Sanjar

凡例

- ◆ : ガズナ朝のセルジューク朝に対する軍事行動
- ★ : セルジューク朝のガズナ朝に対する軍事行動 (*付きはホラーサーン確保のためのもの)
- ▼ : カラ・ハン朝の軍事行動

げる。しかしそれらのほとんどはセルジューク朝により撃退された。セルジューク朝側はその間にバルフ、ヘラート、テイルミズを陥落させ、チャグリ・ベク、アルプ・アルスラン Alp Arslan 父子の指揮のもと、ホラーサーン支配を確立していった。幾度にもわたる軍事行動の失敗を経たマウドゥードは四四〇／一〇四八年、ホラーサーン縁邊の各地の王達に手紙と多額の金品を送り、作戦成功後の領地分配を約束して、對セルジューク大同盟を樹立した。イスファハーンの Abu Kalijar、カラ・ハン朝のハーンが参加したことが史料に見える。しかし Abu Kalijar は軍を率いてケルマーン經由で西行する途上、砂漠地帯（おそらくはルート砂漠）を越える際に多くの兵を失い、自らも病にかかって引き揚げてしまった。カラ・ハン朝の軍はテイルミズ、ホラズムを攻撃したがテイルミズ方面ではアルプ・アルスランに、ホラズム方面ではチャグリ・ベクに撃退され、結局カラ・ハン朝の Tanghach Khan (Ibrahim b. Nasr) とチャグリ・ベクの間で講和條約が結ばれた。なにより肝心のマウドゥードが軍を率いてホラーサーンに向かう途上、重い病にかかり、ガズナに歸還後まもなく死去してしまう [IA ix:558-59; Hs:16b-17a]。こうしてこの大同盟も結局不發に終わったのである。まとめると、王國分裂の危機を收拾しセルジューク朝に對して反撃に轉じたマウドゥードの盡力もセルジューク朝に阻まれ、セルジューク朝によるホラーサーン領有が確立した時期と言えよう。

2 アブド・アッラシード、トゥグリル、ファッルフザード時代

マウドゥードの死後その幼い息子 Mas'ud が即位したが數日で廢位され、マウドゥードの兄弟 'Ali が即位した。同じ頃、ガズナの南方の砦に幽閉されていたマウドゥードの叔父アブド・アッラシード 'Abd al-Rashid がマウドゥードのワズィール 'Abd al-Razzaq により解放され、軍勢とともにガズナに向かった。知らせを受けた 'Ali は逃亡し、アブド・アッラシードが即位した。

この混乱に乘じチャグリ・ベク、アルプ・アルスランは南北両面からガズナへ侵攻をはかり、前者はブストから、後者はトハリスターンからガズナへ向かった。この時、ガズナ朝のハージブ、トゥグリル Tughril は軍を率いて北進して HYBAN⁽⁴⁾でアルプ・アルスランを撃退し、そこから轉進して南に向かいチャグリの軍をブストで撃退した⁽⁵⁾。トゥグリルはブストからそのままスィースターンに進み、同地のアミール、アブー・アルファドル Abu al-Fadl から援軍を率いて來たセルジュークのムーサー Musa Bayghu をも撃破した [IA ix:558, 580, 582; TN i:235; TS:371-72]。

このトゥグリルはもとマフムード Mahmud の臣で、マウドゥード時代に一度セルジュークのもとへ逃亡し、アブド・アッラシード時代に戻って來たと言う。彼はスィースターンで反亂を決意し、北上してガズナに入り、砦にたて籠っていたアブド・アッラシードを捕らえ殺して王位に就いた。そのうえマスウードの息子達九人をも殺し、マスウードの娘を娶った。しかし彼の治世も長くは續かず、篡奪より六十日ほど経ったある日、彼は一人のグラームにより殺された⁽⁶⁾ [IA ix:582-84; Hs:9a-9b; TN i:236; IF:177-78]。彼の死後、生き残っていたマスウードの二人の息子のうち、ファッルフザード Farrukhzād が臣下達の合意によって即位した (四四三 Dh. Q. / 一〇五二・三)⁽⁷⁾。チャグリ・ベクはアブド・アッラシードの死とその後の混乱を知り軍を率いてガズナを目指したが、ガズナ軍に撃退された⁽⁸⁾。王權が固まった後、ファッルフザードは大軍をホラーサーンに送り、セルジュークのアミール Kulsarugh を破って、彼を初め多くの軍人を捕らえた。チャグリは新たな軍を率いてガズナ軍に反撃し、多くの者を捕虜とした⁽⁹⁾ [IA ix:584-85; Hs:9b, 17a; TN i:237]。その結果兩軍の間に捕虜交換が行なわれたと言う。

以上をまとめるなら、この時期はマウドゥードの死からトゥグリルの篡奪にいたるガズナ朝の混乱に乘じ、ホラーサーン領有を確實にしたチャグリ・ベク、アルプ・アルスラン父子が大攻勢をかけるが、今度は逆にガズナ朝に阻まれた時期

ということになる。⁽¹⁰⁾

3 和平とそれ以後

四五一・Safar 月／一〇五九・四月ファッルフザードが死去すると、その兄弟イブラーヒーム Ibrahim が後を継いだ。時期ははっきりしないが、彼の即位と前後して、ガズナ朝とチャグリ・ベクとの間に和議が結ばれた。⁽¹¹⁾ すなわち、双方とも現有の領地を保持し、再び戦うことをしない、旨が定まったのである [IA x:5; Hs:17a; TN i:238-39]⁽¹²⁾。そして和平の證として、四五六／一〇六四年、アルプ・アルスランの息子 Arslan-shah と「ガズナの sahīb (イブラーヒーム)」の娘を娶せ、その後マリクシャー Malikshah の娘 Mahd-i 'Iraq とイブラーヒームの王子マスウード Mas'ud の婚姻が爲された [IA x:41; Hs:34b]。イブラーヒームはこれを期にインドへ向かうこととなったと言われる。⁽¹³⁾ 實際、イブラーヒームのセルジューク朝に對する軍事行動は、僅かに四六五／一〇七二―七三年の Sakalkand 出兵が史料に伝えられるのみである [IA x:78]。四八一―一〇八八―八九年イブラーヒームが死去すると彼の息子マスウードが後を継いだが、彼の時代も状況はほぼ同じであった。四九〇／一〇九七年、ホラーサーンで反亂を起こしたマリクシャーの従兄弟 Muhammad b. Sulaymān にガズナ朝が援助を興えたとの記事が史料に見えるのみである [ibid. x:265]⁽¹⁴⁾。

この時期、和平條約締結により全面戦争は終結し、兩王朝の間に一應の均衡状態が現出したと考えられる。只、その背後には後で述べるような、セルジューク朝のホラーサーン支配の動搖があったことに注意しておかねばならない。

4 サンジャル時代

四九〇／一〇九七年ホラーサーンを押えていたアルスラン・アルグン Arslan Arghun b. Alp Arslan に對してセルジ

ユーク朝のスルタン、ベルキヤルク Barkiyāq により派遣されたのが後のセルジューク朝スルタンであり、五一〇／一一一七年にガズナを征服したサンジヤルである。彼は同年の Muhammad b. Sulaymān の亂を平定した後バルフに留まり、以後、Dawlatshah との戦い（四九一／一〇九八）、ホラーサーンのアミール、ハバシー Habashi との戦い（四九三／一〇〇〇）を経てホラーサーンを平定した。またカラ・ハン朝に對してもサマルカンドに傀儡君主を立てて北方の脅威を除き、混亂していたスイースターンをも一應服屬させた。詳しくはまた後で觸れるが、こうして五〇八／一一一四—一五五年までにサンジヤルによりホラーサーンの秩序は回復され、スイースターン、マールワラー・アンナフル方面の安全も確保されて、對ガズナ朝作戦の條件が整ったのである。

以上、年表にしたがって四三二／一〇四〇—四一一年以降の政治史を概観してきた。次章以下でこのような政治状況の變動が國境地帯にどの様に影響したかを考えてみたい。

二 北方の状況

まず北方の主戦場、トハリスターン方面について検討する。トハリスターンは地名としてはかなりルーズに用いられ、その正確な範圍を確定するのはなかなか困難である。しかしここでは大體バルフ以東、アム河以南、ヒンドゥークシユ以北を指すと考える [Minorsky 1982:337]。

1 四六五／一〇七二—七三年までの状況——HYBAN/Hupyan と Sakalkand

前章であげた時期区分に従い、先ず四六五／一〇七二—七三年までの状況を考えてみる。しかしこの時期、北方につい

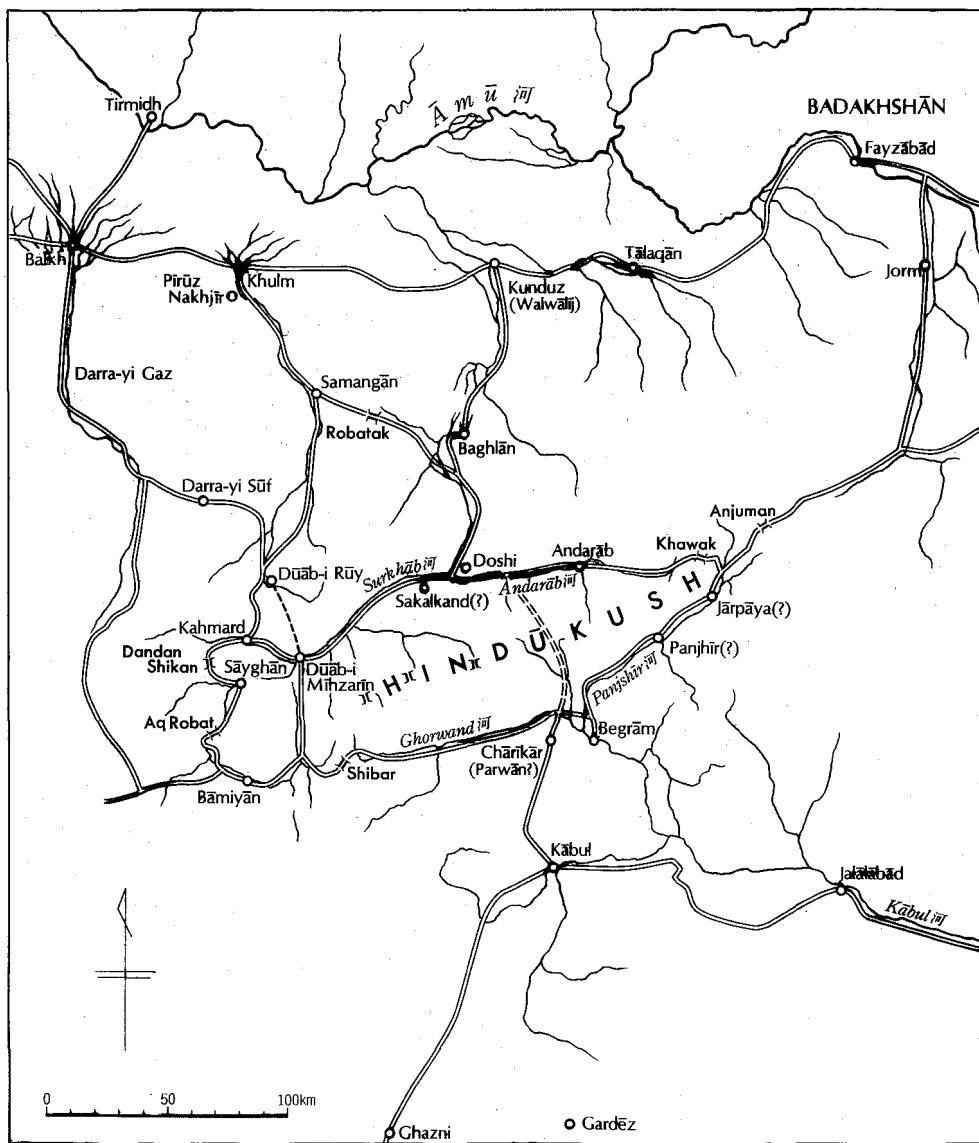
て具體的に知れる地名は残念ながら HYBAN と Sakalkand のみ（表1参照）であるので、この二つを手がかりに考えるしかない。

先ず HYBAN であるが、この地名はガズナ朝の同時代史料である *Ta'rikh-i Bayhaqi* と *Zayn al-Akhdar* 及び Ibn Babā の *Kitāb Rā's Mal al-Nadīm* に現われる [TB:882, 883, 885; ZA:204, 205; IB:141]。 *Zayn al-Akhdar* の校訂者ハビービー 'A. H. Habibi はこれを "Hupyan" と読み、音の類似から現チャリカル⁽¹⁶⁾の北西方にあるオピアンという村がこれに當たると考えた。アダメック L. W. Adamec によればオピアンは現在、タジク人三百家族が住む村であると言う [Adamec 1985:613]。

それではこの説の妥當性はどうか。先に觸れたように我々が問題にする HYBAN/Hupyan は戦略的要地であつたらしい。それはマウドウード率いる軍がそこに駐留したこと、またセルジューク軍との戦いがそこで行なわれたことから推測される。そこで、ヒンドウークシュ越えのルートと戦略的重要性という観点からこの地名を再考し、HYBAN/Hupyan を當時の政治史のコンテクストの中に位置づけることを以下で試みる。その手始めに文獻史料から知られる十一世紀までのヒンドウークシュ越えのルートを見ておこう（圖1参照）。

六世紀を境にヒンドウークシュ越えルートがインドと他の世界を結ぶ要路としてクローズアップされてくること、既に桑山正進氏によって明らかにされている [桑山 1985]。桑山氏によれば六―七世紀のインド僧、中國僧がとった道は以下の通り。すなわち、六世紀のジナグプタは、カーピシー→大雪山西足→エフタル→ガルバンダ・ホタンというルートを取り、同じく六世紀後半のダルマグプタはタッカデーシャー→カーピシー→雪山西足→バグラーン→バダフシャンというルートを取った。また次の世紀の玄奘は往路と復路の二度ヒンドウークシュを越えているが、往路は、縛喝（バルフ？）→揭職⁽¹⁶⁾

圖1 トハールスタン地図



セルジューク朝と後期ガズナ朝

↓バーミヤーン→カーピ
シーと進み、歸路は、阿薄
健↓漕矩吒（ザイブリス
ターン？）↓カーピシー
↓アンダラーブ→闊悉多
（Khost）→活（Walwālīj）
というルートを通ってい
る【桑山 1985:166-71】。
そこでこれら行歴僧が用
いたヒンドウークシュ越
えのルートは、知られて
いる限りでは、

・カーピシー→パンジュ
シール→アンダラーブ
↓トハールスタン
・カーピシー→バーミヤ
ーン→トハールスター
ン（バルフ）

の二種類であったと考えられる。この二つはバルワーン（現チャリカル近郊）からパンジュシル川沿いに東北へ進む道と、ゴールバンド川沿いに西方バーミヤーンに向かう道に各々當たる。

一方九—十世紀に書かれたイスラーム地理書に現われる道はどうであろうか。ド・フリーエ De Goeje 校訂による『アラブ地理叢書』におさめられた八つの地理書のうち、バルフ、トハーリスターン方面にまで記述が及んでいるのは *Istakhrī*, *Ibn Hawqal*, *Maqdisī* の三書であるが、⁽¹⁷⁾ それらに記されるルートは

・バルフ→*Khulm*→*Samanjan*→*Andarāba*→*Jarbāya*→*Banjīr*→*Farwān*（バルワーン）（計十五日行程）
・バルフ→*Madhr*→*Kah*（*Kahmard*）→バーミヤーン（計十日行程）

の二種類である。方向の違いこそあれ、それらは行歴僧達のルートと合致する。そしてそれらはガズナ朝時代にも存在したことが年代記から確認できる。

Ta'rikh-i Bayhaqī は四二〇／一〇三〇年代、マスウードが何度かヒンドウークシュを越えたときのことを記しているが、中でも次の三度は途中の地名がある程度分かる例である。すなわち、四二二／一〇三一年には、バルフ→*Khulm*→*Piruz Nakhjir*→*パンタラーン*→*Darra-yi Ziraqān*（不明）→*Darra-yi Ghurwand*→バルワーンといういわばゴールバンド・ルートを取り「[TB:319-21] 同年秋には逆に南から、ガズナ→カーブル→バルワーン→*Pazh-i Ghuzak*（*Ghurak*？）→*Chugāni-yi Andarāb*→*Walwālīj*→バルフというようにパンジュシル・ルートを取っている」⁽¹⁸⁾ [ibid.:376-78]。ただ、*Ghuzak*（*Ghurak*？）が現在の *Khawak* 峠に當たるかどうかは不明である。また、四二三／一〇三二年にはバルフから *Darra-yi Gaz* ⁽²¹⁾ を經由してガズナへ到ったと言う [ibid.:454-55] が、これはバルフからバルフ川沿いに南下してバーミヤーン方面に向かうと言う、いわばゴールバンド・ルートの変種である。以上の場合には全て軍を引き連れた旅であり、ガズナ朝の時代ヒンドウークシュを越えバルフ、トハーリスターンに出るメイン・ルートはいま見た三種類、すなわち

・パンジュシル川沿いに北上しおそらくは Khawak 峠でヒンドウークシュを越えアンダラープへ出る

・ゴールバンド川沿いに西行し Shibar 峠からバーミヤーンに出てスルハープ沿いにバグラーン方面あるいは Samangan 方面に北上

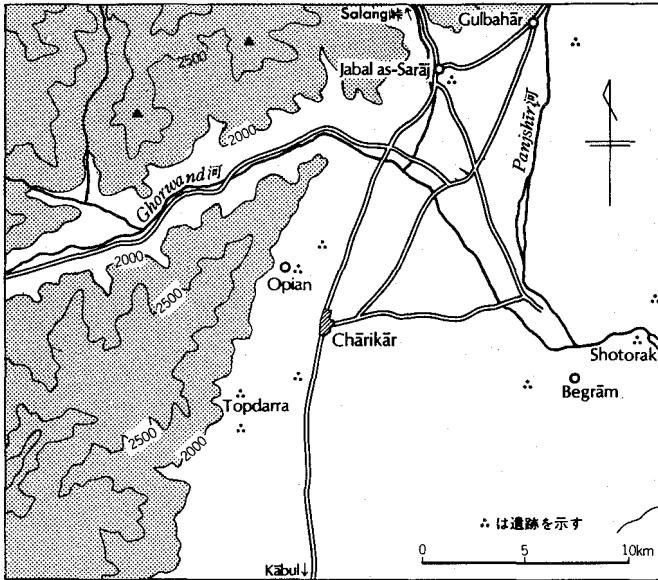
・バーミヤーンから Kahmard へ至りバルフ川沿いに Darra-yi Yusuf Darra-yi Gaz を通過し、直接バルフに到るであったと考えられる。⁽²²⁾ ここでクローズアップされるのがバルワーンの重要性である。北方からみた場合どのルートを取ろうとも全てバルワーンを通る。「[バルワーン]は商人の集まる地であり、インドへの門である。」「[H'A:112]と言われるこの地の重要性はあらためて指摘するまでもなからう。⁽²³⁾ ちなみに歴史的バルワーンの城趾はパンジュシル、ゴールバンド両河の合流点に向って北から南へ突き出した山塊の南端に位置する、現在の Jabal al-Saraj (圖2参照) という小村の近くと考えられている [Ball 1962 1: 131; Foucher 1942-47: 141; Hackin 1939: 4]。

次に四三一／一〇四〇年のマウッド軍の HYBAN 行について考えてみる。マスウッドは、さきに先遣隊としてバルフに送った Altuntash の軍がセルジューク軍に敗れたとの報を受け、本格的な援軍を送る必要に迫られていた。この時既にバルフはセルジュークに包圍され、バグラーン近邊の人々もセルジュークに従っていたと言う⁽²⁴⁾ [TB:880]。それゆえスルタン・マスウッドが援軍の司令官マウッドに與えた指令は、「準備してバルワーンと HYBAN に向かえ。」と言うものであり、そこに留まって様子を見定めてから「トハリスターンに行き冬をそこで過ごし、可能ならばバルフへ行って敵を追い拂え。」と言うものであった [ibid.:885, 895]。ヒンドウークシュの北側の様子を見、同時にセルジュークの南下を警戒しながら行動方針を決めるのなら、前述の如くパンジュシル道、ゴールバンド道が出會うバルワーン近邊は最適の地であったと考えられ、HYBAN/Hupyan がバルワーン近邊であるというハビービーの説の妥当性は高いと考えられる。

さて Hupyan が本當に現オピアン（あるいはその近邊）であるのなら、そこにはなにかそれにふさわしいものがあつたのであろうか。圖2は現在のチャリカル近邊の略圖であるが、圖示した通り、今のオピアンはゴールバンド・ルートとパシエール・ルートの合流點に向かつて西南から東北に突き出した山の端の東斜面に位置する。地圖上でオピアンの傍らにある遺跡のマークはマッソン、フシエにより報告されたマウンドである。貨幣をふくむいくらかの遺物が採集されたと言うが、残念ながらマウンドそのものについては何も明らかにされていない [Ball 1982 1: 126; Foucher 1942-47: 143; Masson 1842 3: 161]。一方ここに一つの興味深い記述がある。ムガル朝の創設者バーブル Zahir al-Din Muhammad Babur は十六世紀初頭フェルガーナからカーブルへ向かったが、彼の自敘傳 *Bābur-nāma* にはその時の彼の行程がかなり詳しく書かれている。バーブル一行は Qubadīyan → Kahmard → Qizil Su (スルハープ) を下る → Dushi → Khwāja Zayd → Ghūrwand の Ushur Shahr → Hūbyān kōiāl (峠) → Qara Bāgh → カーブルというルートを取った [閒野 1984: 32-42]。この記述からもやはり、Hūbyān (Hupyan) がゴールバンドとカーブルの間の地域、すなわちバルワーン地方にあつたことが裏付けられるが、ここで注目には値するのは Hūbyān (Hupyan) を峠と言っていることである。これは何を意味するのか。現在でもゴールバンド溪谷から山を越えて南下し、直接 Qara Bāgh 方面へ抜ける道がいくつかあるらしいが、バーブルが通つたのもそれらの道の一つなのだろうか。無論ここでは如何なる斷定も下しえないが、敢えて推測するならば、Hupyan とは今のオピアンの村にそのまま當たるのではなく、もう少し廣い地域を指す地名ではなかつたか。⁽²⁵⁾

それでは次に四四二—四三—一〇五一年の Hupyan の戦いとそれが持つ意味を考えてみたい。この戦い、というよりもセルジューク朝の攻勢の前段階としてチャグリ・ベク、アルプ・アルスラン父子によるトハリスターンの平定があつた。先づ四三二—一〇四〇—四一年、マウドウッド軍の Hupyan からの撤退のゆえに、バルフにたて籠って守っていた Amirak Bayhaqi と Altunash が町をチャグリに明け渡したことにより、北方の要地バルフがセルジュークの手に落ちた [IA

圖2 チャリカル近郊圖



セルジューク朝と後期ガズナ朝

ix:483-84」。次いで四三四／一〇四二—四三年頃、セルジューク朝に抗してマウドウッドへの臣従を守っていたヘラートに對し、チャグリ・ベクは攻勢をかける。おそらくはこのすぐ後くらいにヘラートがセルジュークの手に落ちたと考えられる。なぜなら次にヘラートが史料に現われるときにはそこはセルジュークのムーサーの據點となっているからである [ind. ix:488, 506, 583]。最後におそらくは四三五／一〇四三—四四年、かつてバルフにいた Amīrak Bayhaqī が固守していたティルミズもチャグリ、アルプアルスラン父子の前に陥落する。⁽²⁶⁾そしてチャグリはバルフ、トハリスターン、

ティルミズ、Qubādiyān, Wahsh, Walwālīj の地をアルプ・アルスランに任せたと言う [Hs:16a-b]。

さて Hupyan の位置を前述の様に考えるならば、アルプ・アルスラン軍が Hupyan にまで到ったということはセルジューク軍がヒンドウクシュを突破してパルワン地方、すなわちかつてのカピシー國領にまで攻め込んで来たことを意味する。これはガズナ朝にとって未曾有の大危機であったと言える。パルワン地方からはインドへもアフガニスタン東部へもたやすく進むことが出来ると考えられるからである。戦闘がどのような経緯で爲されたかは不明であるが軍を指揮してセルジューク軍を撃退し、この危機を乗り切ったトゥグリルが、その功をもってガズナ朝内部で大きく勢力を伸ばしたであろうことは想像に難くない。おそらくはこの事件がその後の彼によるガズナの王位篡奪へとつながる大きなきっかけとなったのであろう。⁽²⁷⁾またこの事

件から、この時點でガズナ朝がパンジュシル、ゴールバンド流域、すなわちヒンドウークシュ南麓を確保した、あるいは確保していたことが明らかとなる。

次に Sakalkand について検討するが、この地名についてはミノルスキー V. Minorsky の説が優れていると思われるのでそれに従う。

ミノルスキーはこの地名について次のように説明する。すなわち、Sakalkand は Ya'qubī Istakhriti ではバグラーンと Walwalij の間に記されるが、*Hudud al-'Alam* ではバグラーンの前に記されており、マルクヴァルトの推測する如くバグラーンの南方であったようである。⁽²⁸⁾ ビールニーには Sakalkand の邊りは FARFZ と記される。FARFZ は現 Barfak (スルハープ沿い、Doshi のやや東) に當たるであろう。Sakalkand は Barfak 近くの Iskan (アムダラーブ川を挟んで Doshi の對岸あたり?) にあたるのではなからうか、と [Minorsky 1982:338-40]。筆者は残念ながら手持ちの地圖史料に據って Iskan の位置を確定させることが出来なかったが、⁽²⁹⁾ このミノルスキー説に従って Sakalkand を少なくとも Barfak 地域と考えるならば、そこはスルハープ流域、すなわちバグラーン、ゴーリー地域あるいはバグラーン、Walwalij ルートへの南からの入口に位置する要衝であったことになる。そしてそれは、圖1に示した通りトハリスターン側からのヒンドウークシュ越えルートの分岐點にはば當たるのである。

では Sakalkand 出兵はどのような状況下で起こされたのか。残念ながら當時のガズナ朝内部について語る史料はないので、以下に述べるのは専らセルジューク朝側の事情である。

四六五／一〇七二年、當時のスルタン、アルプ・アルスランはサマルカンドにいたカラ・ハン朝の Nasr b. Ibrāhīm に對する遠征を行なったが、ジャイフーンを渡ったところで自分の部下に刺殺されてしまった(四六五・R・I月／一〇七

二・十一月)。遠征に同行していた皇太子マリクシャーがその地で即位し、すぐさま軍の撤退にとりかかった。一方アルプ・アルスランの計報を受けた西方ではケルマーンの Qawurt Bek b. Isra'il がスルタン位を目指して行動を起こし、レイに向かった。急いで西行しレイに入ったマリクシャーは、四六六／一〇七三—七四年ハマダーン近郊で Qawurt Bek と戦い、勝利をおさめて危機を脱した [IA x:73-74, 76, 78-79; Hs:31b, 32b-34a; Sij:28-30; RS:120-24, 126-27; ZN:44-46]。マリクシャーが西方で戦っている間に東方では四六五・R・Ⅱ月／一〇七二・十二月、サマルカントの Nasr b. Ibrāhīm がティルミズに侵攻し、そこを攻め取った。マリクシャーは西行時、バルフに自身の兄弟アヤーズ Ayaż を残して後の守りを任せていたが、彼はその時グーズガーンに行っており、その留守に Nasr はバルフをも略奪した。J・Ⅰ月／一〇七三・一月アヤーズはバルフへ歸還し、J・Ⅱ月／同二月にはティルミズへ進軍したが Nasr 軍の前に敗走し、トハールスターンは北方からの脅威に晒されることとなった [IA x:77]。

イブラーヒームの Sakalkand 出兵はこのような状況下に起こされたものであった。ガズナ軍はその地でマリクシャーの叔父 'Uthmān を捕らえ、セルジュークのフミール Kumashtekin Bilga Bek の追撃を受けながらも引き揚げた [ibid. x:78]。なお、Ibn al-Athir によればこの出兵は四六五・J・Ⅰ月／一〇七三・一月のことであるが、Husayni によれば、マリクシャーが叔父 'Uthmān を Walvalij に任じたのは Qawurt の亂平定後、ホラーサーンに戻ってからのことである [Hs:34b]。逆に Ibn al-Athir は 'Uthmān のトハールスターン行きを経緯に全く觸れていない。Husayni に従うならばこの出兵は早くとも四六六／一〇七三—七四年の出来事でなければならない。

いずれにせよガズナ朝が Sakalkand に出兵し、セルジューク朝のスルタンの叔父を捕らえたということはこの時期スルハープ流域およびおそらくはアンダラーブ流域、すなわちヒンドウークシュ北麓がセルジューク朝の影響下にあったことを示していると考えられる。

以上 HYBAN/Hupyan' Sakalkand の二つの地名を手がかりに四六五／一〇七二—七三年頃までの北方における兩王朝の境界について考えてみた。その結果、おそらくはセルジューク側はトハリスターンをアンダラプ、スルハーブ流域まで押え、ガズナ朝側はゴールバンド、パンジュシル流域を押えていた、すなわち大體においてヒンドウークシュが境界であつたのではなからうかとの、言ってみれば當然の結論を得た。

2 バルフ、トハリスターンの混亂——四六五—九一／一〇七二—九八

さて、前節で見たようなトハリスターンの状況はそれ以後の不戦期においてどの様に變化して行つたのであろうか。セルジューク朝のバルフ、トハリスターンの統治の變化をもとに以下この點を考えてみたい。

先ず、チャグリ・ベク以降のセルジューク朝のバルフ、トハリスターンの統治者達を史料から抜き出し、その活動を見てみよう。

① アルプ・アルスラン（四五二—五五／一〇六〇—六三）

四五二・Safar 月／一〇六〇・三月にチャグリが死去すると、アルプ・アルスランがホラーサーンの malik となつたが、彼がバルフ、トハリスターンをも領有していたと考えられる [IA x:6; Hs:17b]。

② 不明（四五五—五八／一〇六三—六六）

四五五／一〇六三年、死去したスルタン・トゥグリルの後を繼いでアルプ・アルスランがイラクに赴いて大セルジューク朝のスルタンとなつた [IA x:29; Sij:23; ZN:27]。彼が西方にある隙についてホラーサーン以東で幾つかの反亂が起ころ。先ず Khuttal のアミール（名前は不明）が、次いでヘラートに居た彼の大叔父ムーサーが、また Chaghāniyān

のアミール（やはり名前不明）が反亂を起こした。アルプ・アルスランは叔父 Qutalmish をレイにおいて破り（四五六／一〇六四初）、イラクの混亂を鎮めた後、四五五—五六／一〇六三—六四年の間に親征を行なってこれらの反亂を次々と平定していったが、この時バルフ、トハリスターンの統治者の名前は言及されていない⁽⁸⁾ [IA x:34, 36-37; Hs:18a-b; ZN:28]。

③ Sulaymān b. Chaghri Bek (バルフ) と Ilyās b. Chaghri Bek (Chaghāniyān' トハリスターン) (四五八—五六／一〇六六—七三?)

四五八／一〇六六年アルプ・アルスランは息子マリクシャーを皇太子（ワリー・アフド）に指名し、同時に諸侯（主にスルタンの兄弟、息子達）にイクタアを分割した。その際バルフは Sulaymān b. Chaghri Bek に、Chaghāniyān' トハリスターンは Ilyās b. Chaghri Bek に與えられた [IA x:50]。ただ、この兩者の活動については史料は沈黙している。

④ アヤーズ (四六五—六六／一〇七三—七四)

前述の如く、四六五／一〇七二年マーワラー・アンナフル遠征途上でアルプ・アルスランが刺殺されたことにより、即位したマリクシャーはマーワラー・アンナフルより撤退を開始して、兄弟アヤーズをバルフに残したが、アヤーズはサマルカンドの Nasir b. Ibrahim の軍勢に敗れ、トハリスターンは危機に陥った。その後のアヤーズの状況は不明である。

* ④ 'Uthmān b. Chaghri Bek (? 四六六／一〇七四) (Walwālij)

これも前述の通り、イブラーヒームの Sakalkand 出兵の折りのトハリスターンの（正確には Walwālij の）アミールであり、ガズナ軍に捕らえられた人物である。その後の活動はやはり不明で、ガズナ軍から解放されたのかどうかも分からない。

⑤ テキシュ Tekish b. Alp Alslān (四六六—七七／一〇七四—八四)

四六六／一〇七三年 (Hs:35b) では四六七／一〇七四年) マリクシャーは西方の諸反亂を平定後東へ向かい、カラ・ハ
ン朝に奪われていたティルミズを奪還した。ティルミズは將軍 Sawtekin に委ねられ、バルフ、トハリスターンはテキ
シュにイクタアとして與えられた [IA x:92; Hs:35b⁽³⁾]。その後、四七三／一〇八〇―八一年にテキシュはマリクシャー
のもとを逐われた七千人の兵を配下に加え、ホラーサーンで反亂を起こして、メルブ・アッルド、メルヴ、ティルミズ
等を押えたが、マリクシャーの遠征により和議が結ばれた [IA x:118-19]。しかし、四七七／一〇八四―八五年テキシ
ュはマリクシャーのルーム遠征の際に再度反亂を起こした。マリクシャーは西方遠征より急遽戻り討伐に向かった。テキ
ュは捕らえられ、その息子 Ahmad が後を継ぐことになった [ibid. x:137-38; ZN:66]。

⑥ Ahmad b. Tekish (四七七―／一〇八五―?)

彼の活動は不明である。

⑦ アルスラン・アルグン (四八五―八九／一〇九二―九六)

四八五・Shawwal 月／一〇九二・十一月のマリクシャーの死去にともない、彼の兄弟達、息子達の間でスルタン位を
めぐる争いが始まる。マリクシャーの兄弟、アルスラン・アルグンはマリクシャーの死後、すぐさまホラーサーンに向か
い、メルヴで軍を集め、バルフ、ティルミズをはじめホラーサーンの大部分を押えた。そして西方にいたベルキヤルクに
對しホラーサーンの領有權の承認を求めた。しかしベルキヤルクはそれを認めず、叔父ビヨリ・バルス Buri Bars を軍
勢とともにホラーサーンに派遣した。ビヨリ・バルスはアルスラン・アルグン軍を撃破し、アルスラン・アルグンはバル
フへ撤退した。ビヨリ・バルスはそのままヘラートに留まった。その後再び體勢を整えたアルスラン・アルグンはメルヴ
から、ビヨリ・バルスはヘラートから軍を進め、四八八／一〇九五―九五年両者は再び會戦した。この時はアルスラン・アルグ
ンが勝利をおさめ、ビヨリ・バルスを捕らえてティルミズに幽閉し、ホラーサーンに覇をとらえた。そして刃向かう恐れ

のあるホラーサーンのアミール達を次々と處刑し、またホラーサーンの町々の城壁を破壊していった(四八九／一〇九六)。しかし翌四九〇／一〇九七年彼に恨みを持つ配下の手にかかって死去し、彼の短いホラーサーン支配は終わりを告げた。彼の死の直前、ベルキヤルクは兄弟サンジャルを司令官とする軍をホラーサーンに向けて送っていたが、この軍が到着する前にアルスラン・アルグンは死んでいた。後からサンジャル軍に合流したベルキヤルクはニーシャープールからバルフへ進んだ。アルスラン・アルグンの軍は彼の幼い息子を *malik* 位に就けていたが、ベルキヤルクの接近を知りトハリスターンへ逃れ、それから降伏してきた。ベルキヤルクはバルフに七ヶ月間留まり、ティルミズをも回復した。マール・アンナフルでもベルキヤルクの名でフトゥバがなされ、ホラーサーンは一應ベルキヤルク、サンジャルのもとに定まったが、状況は決して安定などと言えるようなものではまだなかった [IA x:262-64, 265; Hs:48a-49a; Slj:37; RS:143-44; IF:22, 53, 226; ZN:78]。

⑧ サンジャル (四九〇—五一—一〇九七—一一七)

前述の如くサンジャルはベルキヤルクとともにバルフにいたり、その後も同地に留まった。ベルキヤルクはやがてイラクに戻ったが、後に残ったサンジャルの前には克服すべき数々の難問が残されていた。

四九〇／一〇九七年、まだベルキヤルクがホラーサーン(おそらくはバルフ)にいた間に、ホラーサーンにいた *Muhammad b. Sulaymān b. Chaghri Bek* が反亂を起こした。彼は征服地でガズナ朝の支配者(この當時はマスウード三世)の名でフトゥバを行なうという条件で同朝の援助を取り付けてバルフに向かった。しかしサンジャルと戦い敗北し、捕らえられて眼を潰された [IA x:265-66]。

同年ベルキヤルクがイラク方面の反亂平定のためホラーサーンから歸還する際、*Qudan* と *Yarqash* と言う二人の者がメルヴで反亂を起こし、ホラズムをも攻めた。ベルキヤルクはイラクへ戻る途上からハバシーを反亂平定のために派遣

した。ハバシーは反亂軍に對して勝利をおさめ、Yarqash は捕らえられた。一方 Qudan はバルフのサンジャルのもとに身をよせ、その配下に加わった。ハバシーはこの後ホラーサーンの統治に任じられた [ibid. x:266-67; Hs:49b]。

この頃トハリスターンではセルジュークの王子の一人で、かつてのムーサーの軍を配下に收め持っていたと言われる Dawlatshah とする人物が⁽³²⁾いつの頃からか勢力を持っていた。彼は Walwalij Kumanj (? Kumij) を奪い、領有していたが、四九一／一〇九八年サンジャルはこの Dawlatshah と戦い、勝利を収めた [IA x:279]。同時にティルミズをも支配下に加えてバルフ、トハリスターン方面の支配を強固なものとした。その結果やがてサンジャルとハバシーの間に對立が生じることとなった。

四九三／一〇〇〇年ムハンマド Muhammad b. Malikshah との戦いに敗れホラーサーンに逃れてきたベルキヤルクはハバシーと合流する。そしてハバシーの要請とともにバルフのサンジャルを攻めることとなる。ホラーサーンの支配權をかけた決戦であったが、結局戦いはサンジャルの勝利に終わり、ハバシーは處刑され、ベルキヤルクはイラクへ逃れた [ibid. x:296-98; Hs:49b]。こうしてサンジャルのホラーサーンにおける覇權が確立した。

翌四九四／一〇〇〇一年今度はムハンマドがベルキヤルクに敗れ、サンジャルを頼ってホラーサーンに來た。サンジャルはダームガンまで出向いてムハンマドと合流し、そのままレイに向かった。ところがサンジャルが留守の間にその配下 Kuntughdi の誘いに乗ったサマルカンドの Qadir Khan Jiora'i b. Umar は軍をアム川方面に進め、ティルミズを奪った。サンジャルは急ぎバルフに戻り Qadir Khan を捕らえ處刑し、ティルミズへ侵攻してそこを奪還した。その後サマルカンドに進攻したサンジャルは四九五／一〇〇一年自分の許にいたカラ・ハン朝の一族 Muhammad Khan を傀儡としてサマルカンド統治に任じた [ibid. x:332-33, 347-48, 350; Hs:51a]。

こうしてサンジャルによってホラーサーン、バルフ、トハリスターン、マーワラー・アンナフルが平定されたのであ

る。

以上見てきた如くアルプ・アルスランのスルタン位繼承以後の時代、外敵や内部反亂によりセルジューク朝のバルフ・トハリスターン支配は動搖し不安定なものとなっていた。特に四八五／一〇九二年にマリクシャーが死んだ後は、イラク方面において王子達による激しいスルタン位争いが繰り廣げられたこともあって、そのような動搖はホラーサーン全體に波及し、とりわけバルフ、トハリスターンは叛徒の巢といった様相を呈したように見える。少なくとも西方イラクにいたセルジューク朝スルタン33の東方領土に對する影響力は弱まっていた。強力な支配の缺如は例えば Dawlatshah の如き、いつの間にかトハリスターンに勢力を張るといふような存在を可能ならしめた、そしてこの様な状況は十二世紀初頭にサンジャルが、チャグリ・ベク以後初めてホラーサーンを中心に確固たる政權を樹立するまで續いたのである。

さてこの間ガズナ朝がみせた動きと言えば前述の Muhammad b. Sulayman の反亂に援助を與えたことくらいである。何故セルジューク朝の混亂に付け入らなかつたのか。何故行なわなかつたかという問いは何故行なつたかという問いよりもずっと答えるのが難しい問題ではあるが、可能性としてあり得るのはやはりイブラーヒーム34の時代から再び本格化し始めたインド進出に王國の軍事行動の比重がかかつていたということであろう。逆に言えばバルフ、トハリスターンの混亂はガズナ朝の北方の脅威を取り去り、インド進出に専念し得る状況を與えてくれたのではなからうか。ただこの點に關しては、どちらが原因でどちらが結果なのかを判斷するのは困難である。

このように四六五／一〇七二—七三年以降、ガズナ朝は Sakalkand 出兵を除いて、ヒンドウークシュを越えて北へ進みはしなかつたが、セルジューク朝として約四十年の間バルフ、トハリスターンを實質的に支配していたとは言ひ難い。言い替えるなら、四六五／一〇七二—七三年以降は混亂したバルフ、トハリスターンが兩王朝の間で一種のバッファゾ

ーンの役割を果たしていたと考えられるのである。

三 南方の状況

次いで南方に眼を轉じてみよう。前述の通り南方の係争地帯はブスト、スイースターン地域であった。しかしながらここには北方におけるヒンドウークシュの如き、明確な地理的、自然的境界があった譯ではない。先ず何故ここにおいて兩王朝が接することになったのか、ブストの地理的状況、北方との關係を検討することにより考えてみたい。

1 ブストについて

九—十世紀のアラブ地理書にはアフガニスタン東南部に關して、南西から北へ向かつて弧を描くようにスイースターン、ブスト、ザミーン・ダーウル、ルッハジュ、ザーブリスターンといった地域名が出て来る。このうちスイースターンは現在のヒルマンド湖周邊を中心とする地域。ブストは現在のラシュカリ・ガーフ近郊に Qal'a-yi Bust として残っている。ザミーン・ダーウルはブストからおもに北方グールの山地に向かつて廣がる地域と考えられている。ルッハジュの方は現カンダハール一帯のことで、今も残るパンジュワリーの町が中心であったと言われる。ザーブリスターンはおそらく現ガズニを中心としその南方に廣がる地域と考えられる。

地理書によつてはブスト、ルッハジュをスイースターンに含めるか獨立した地域とみなすかで意見が異なっている。⁽³⁴⁾しかし兩地をザーブリスターンに含めると言う意見はない。それゆゑ地理書の記述のみに據れば、ザーブリスターンとスイースターンの二つを考えた場合(ブスト、ルッハジュをスイースターンの sub-division と考えた場合)、その境界はカン

表2 アラブと zunbil

AH/AD	
31/651-52	al-Rabī' b. Ziyād の軍, スィースターンへ遠征
33/653-54	'Abd al-Raḥmān b. Samura スィースターン總督に、ザミーン・ダーワル, ザープリスターンの王 Zunbil と戦う。
36/657	Ibn Samura 軍, Zunbil, Kābulshāh と戦う。
46/666	al-Rabī' b. Ziyād, ルッハジュ, ザミーン・ダーワルにおいて Zunbil と戦う。
53/673	'Abbād b. Ziyād, カンダハール, カーブル方面に遠征。
61/681	Yazid b. Ziyād, ザミーン・ダーワル, カーブル方面に大規模な遠征。しかし Zunbil に大敗。
67/686	'Abd al-Aziz b. 'Abd Allāh, スィースターンに進出してきた Zunbil を撃退。
74/693-94	'Abd Allāh b. Umayya, Zunbil と戦い, 和議を結ぶ。
78/697	'Ubayd Allāh b. Abī Bakra, Zunbil と戦い, 大敗。
79/698-99	Zunbil と和議。
80/699	Ibn al-Ash'ath スィースターンで反亂。Zunbil と結ぶが, アラブ軍に敗れ, プストにいた Zunbil のもとへ逃げ込む。
138/755	Sulaymān b. 'Abd Allāh, プスト, ザミーン・ダーワルへ進軍, Zunbil を撃退。
151/768	Ma'n b. Zā'ida al-Shaybānī, プストを據點としてザープリスターン遠征。
179/795	Ibrāhīm b. Jibril, プストへ進軍, ザミーン・ダーワルにおいて Zunbil をやぶる。

(以上 Bosworth 1968b に據る)

ダハールの北であったことになる。

しかしながら政治状況を考えると事情はやや違って来る。すなわち、七世紀後半スィースターンに進出し、そこを據點に北東をうかがうアラブ軍と、「スィースターン」 Bilād al-Dāwar, ルッハジュの王」[IKh:40]と言われた Zunbil はプスト、ルッハジュ地域で接し對立した(表2)。また Zunbil の夏營地はザープリスターン、冬營地はルッハジュであったと言う [FB:494; Murgotten 1969:153; Bosworth 1968b:35]。その結果七―八世紀にはプスト近邊が南北對立の接點となった。

九世紀末サッファール朝の興隆により一時これらの地域全てが統一されたが同朝の没落後各々の地域は分裂した。そして再び十世紀末にプスト以北がザープリスターンの支配者、すなわちガズナ朝の手に落ちる(三六七/九七八)。スィースターンもマフムードによって三九二―一〇〇二年に征服されたがかつてのサッファール家のアミールにある程度の統治權が認められたという點でプスト以北の地方やホラーサーンとは状況が異なっていたようである [Bosworth 1977: 27-28]。ガズナ朝の軍もホラーサーンに向かう際はスィースターンを経由せずプストから Farah 方面へ出

ることが多かったようである。そのためかガズナ朝の同時代の年代記にもテギーナーバード（カンダハール）やブストは頻繁に現われるがスイースターンは餘り現われない。

これに比べてブストと北方の結びつきの強さを物語るのが、ブスト近くに残るラシュカリ・バーザールの壮麗な宮殿跡である。この遺跡は一九四九—五一年にフランスのアフガニスタン考古學調査團 (Délégation Archéologique Française en Afghanistan) によって發掘調査され、その報告書が出されている。遺跡はヒルマンド河の東岸にあり、三つの宮殿（北、中央、南）、マスジド、バーザールおよび兵舎といった主要建築物だけでも南北に約二キロの長さを持つ。このうち南宮はスルタン・マフムード及びマスウードの時代のものであることが確實視されている [Schlumberger 1978:24]。中央宮についてはアレン T. Allen がガズナ朝以前のものである可能性を指摘している [Allen 1988:61]。宮殿自體は後のモンゴルによる破壊の時まで利用されていたらしいが、バフラームシャーに到るまでのガズナ朝の各君主の貨幣が發見されていることから、これらの建築物が、この地域が再び政治對立の焦點となった四三〇—一〇四〇年代以降もガズナ朝の君主達によって利用されていたことは確實である [Gardin 1963:167-69]³⁶。このような大宮殿の存在とその利用（軍事的意味をも含めた）が意味するものは、當然のことながらブスト一帯がガズナ朝にとってきわめて重要な據點であったというのである。ルートを考えてみても、ガズナからの道はブストでスイースターン方面、ヘラート方面、ザミーン・ダール、グルル方面へと三本に分かれる。また、ブストの東、ルッハジュのパンジュワリーの町からは南方、スインドへの道が發していた [Isf:251; IH:423]。これはほぼ現在のカンダハール—クエッタ道にあたり、古くからのメインルートであった。³⁶このようにブスト地方は、まさしくアフガニスタン南部の交通の要衝であったと言える。³⁷このような場所をガズナ朝が重要視したのは當然であろう。そして文獻史料、およびラシュカリ・バーザールの遺跡を見る限り、セルジュク朝の壓迫を受けながらもこの一帯は大體においてガズナ朝によって保持され續けた。その結果ブストと、次に見るように

セルジューク朝の支配下に入ったスィースターンとの間に出現した兩王朝の國境地帯は、いま述べてきた如く地理的な意味に加えて政治的、歴史的意味をも持つものであったのである。

2 スィースターンの内紛と兩王朝

それではスィースターンはどの様にしてセルジューク朝の影響下に入り、またその後どのような経過を辿ったのか。先に述べた如くスィースターンはマフムードにより征服され服屬していたが、サッフアル家のアミールがかなりの影響力を持ち、また様々な土着の勢力が内紛を繰り廣げていた。そしてそのような状況は四三二／一〇四〇—四一年以降、同地がセルジューク朝とガズナ朝の接点となったことと相まって、より複雑さを増していった。³⁸ 幸い我々はこの時期に關して *Ta'rikh-i Sistān* を利用することが出来るので、以下四三二／一〇四〇—四一年以降の同地の歴史を簡単に辿ってみよう。

四三二／一〇四〇—四一年、内亂收拾をはかるも、ダンダーナカーンの敗戦後の處理に追われるガズナ側に援助を斷わられたスィースターンのサッフアル家のアミール、アブー・アルファドルはセルジュークと手をくみ、ガズナ朝から離反することを決した。彼の要請によりトゥグリルの從兄弟 *Ertash* が軍をスィースターンに進めて混亂を鎮め、ムーサーの名でフトゥバを行なった。これに對して、おそらくはスィースターンの土豪達からなる反アブー・アルファドル勢力はガズナ朝の援助を求め、ここにアブー・アルファドル、セルジューク對反アブー・アルファドル、ガズナという對立の圖式が成立する。³⁹ しかしこの對立も、同年及びその翌年のマウドウードの派兵(表1参照)が、ムーサー、*Ertash* の援助を受けたアブー・アルファドルに擊退されたことによって、後者の敗北に終わり、アブー・アルファドルは反アブー・アルファドル勢力をスィースターンより排除して行くことに成功した。四四三／一〇五一—五二年、トゥグリル率いるガズナ

軍の攻撃によりアブー・アルファドルとムーサーはヘラートへ撤退し、スィースターンは一時ガズナ朝に制壓されたが、トゥグリルの死後すぐにアブー・アルファドルとムーサーの息子 *Buri* がスィースターンに戻った。そして四四五・*Muharrir* 月／一〇五三・四月トゥグリル・ベクの名でフトゥバが爲され、スィースターンはセルジューク朝の支配下となった [IA ix:518; TS:365-73]。

しかし今度はセルジューク朝の側に問題が生じた。ホラーサーンの *malik* であったチャグリ・ベクとムーサーの間にスィースターンの支配權を巡る對立が生じたのである。四四六／一〇五四年、チャグリ・ベクの息子 *Yāqūt* がマクラーン遠征の途上スィースターンに立ち寄ったが、配下の處遇をめぐって *Yāqūt* とアブー・アルファドルの間に反目が生じた。*Yāqūt* は父チャグリに求め、トゥグリル・ベクからスィースターンの勅許狀 (*mansūr*) を得、四四七／一〇五五年スィースターンへ戻ってスィースターン軍との間に戦端を開く。結局四四八／一〇五六年チャグリ・ベクの使者がスィースターンに到着し、チャグリの名でフトゥバが爲され、彼の名を刻した貨幣が散金された。ところが今度はムーサーがトゥグリル・ベクに苦情を言い、かつての約束⁽⁴⁰⁾を持ち出してスィースターンの勅許狀を得た。トゥグリル・ベクはチャグリ・ベクに次のような手紙を出した。

「二度とこの様な非禮はせぬように。スィースターンの勅許狀はアミール「・ムーサー」・バイグに對して書いたので、今後彼に逆らわず、その命を聞き、彼の名でフトゥバを行ない、貨幣の銘を彼の名に變えよ。チャグリ・ベクの軍がそちら方面に行ったときには彼の命令に従うこと。この旨しかと肝に命じよ。」 [TS:381]

この手紙と勅許狀によりこの對立も決着した。ムーサーは息子 *Buri* を軍とともにスィースターンに送り、フトゥバと貨幣の銘を自分のものに變えさせた [*ibid.*:374-82]。

簡言すれば、この時期スィースターンでは、①セルジューク朝と手を結んだアブー・アルファドルが反アブー・アルフ

アドル、親ガズナ勢力を駆逐、②セルジューク側でのチャグリ・ベクとムーサーの支配権争いがトゥグリル・ベクの命令により決着、という過程を経て、「ムーサーIIアブー・アルファドル」ラインによる支配体制が確立したのである。また四三七／一〇四五—四六年の *Ertash* の遠征(表1参照)あるいは右に述べた *Yaquti* のマクラーン遠征に見られる如く、この時期スィースターンはセルジューク朝の南東方面作戦の前線基地として機能していたと考えられる。

残念ながら四五一—六五／一〇五九—七三の間、*Tārīkh-i Sīstān* の記事は缺落している。他の史料にもこの時期の同地の動きは記されていない。不明とせざるを得ないが、変化は四六五／一〇七三年のアブー・アルファドルの死去を機に始まったようである。

彼の後、息子 *Tahir* が即位したが、四六七／一〇七五年から *Abu al-'Abbās* (スィースターンの土豪) がスィースターンの町(現ザランジュ)を繰り返し攻撃し、ついに四八〇／一〇八八年、*Abu al-'Abbās* は *Tahir* を處刑して、自らアミール位に就いた。しかし二年後、*Abu al-'Abbās* も死去し、再びサッフアール家の *Khalaf b. Abu al-Fadi* がアミールとなった。*Khalaf* はおそらくはスルタン・マリクシャーへの挨拶のために即位後すぐにホラーサーンへ向かったが、留守中の代官であった *Abu Mansur Qawqahi* が町の人々にかつがれて彼に背いた。ホラーサーンより戻った *Khalaf* は *Abu Mansur* と戦い、最終的には勝利を得た。しかし、四八五／一〇九二年、*Amir Mu'ayyad*(やはりスィースターンの豪族か)が *Khalaf* を攻めて打ち負かしアミール位を奪った。四八六／一〇九三年、*Khalaf* はセルジュークのアミール *Qizil Sarigh* (ケルマーン・セルジューク)とともに再来したが敗北し、次いでガズナの軍とともに再々来したが、ガズナ軍は町を攻圍中に突如撤退してしまった。*Khalaf* は四八七／一〇九四年スィースターンを奪回したが、その後もスィースターンのアミール位をめぐる争いは続き、そのうえカルマト派や外部勢力の進攻、自然災害等のためにスィース

ターンは混迷を續けた。四九六／一一〇二年、サンジャルの配下のアミール Barghash の來訪で Khalaf はサンジャルに降り、一應狀況は治まったかに見えたが、四九九／一一〇六年 Khalaf の息子 Taj al-Din が父に背くなどなかなか同地に安定は訪れなかったようである [ibid.:383-90]。

以上の如く、四六五／一〇七三年のアブー・アルファドルの死去を機に「セルジュークIIアブー・アルファドル」ラインによるスィースターン支配は崩壊し、その後は彼の子孫とスィースターンの各豪族とがアミール位を巡って争い續けた。おそらくは、前章で述べたようなセルジューク朝自體の東方支配の動搖のゆえもあって、同朝の統治者が任じられた氣配もない。サンジャルが登場するまでの間、スィースターンは、ある意味ではセルジューク朝（特にホラーサーン方面の）の影響圏から脱落していたと言えよう。一方、文獻史料を見る限り、ブストを保持していたガズナ朝も混亂したスィースターンにはあまり積極的な關心は持たなかったようである。その結果セルジューク朝の前線基地としての同地の役割は消滅し、かつてブスト・スィースターン間にあった兩王朝の國境は、きわめてぼんやりとした存在となっていたと考えられる⁽⁴⁾。その意味ではスィースターンも、この時期一種のバッファゾーンとして南方國境の不明瞭化に關與したと言えるかも知れない。

むすびにかえて

以上、資料不足の感はぬぐえないながらも十一世紀中頃から後半にかけてのセルジューク朝とガズナ朝の國境地帯の様相と政治狀況とを検討してきた。簡単にまとめるならば、

1 大セルジューク朝時代：セルジューク朝のホラーサーン支配およびトハリスターン、スィースターン支配の安定↓

南北で兩王朝が接し戦う

2 セルジューク朝の内亂と東方の混亂：四六五／一〇七二—七三年頃を境に南北兩國境地帯が混亂の様相を呈し始める

↓バッファゾーンへと變化

3 サンジャルの登場：ホラーサーンおよびその周邊の再平定↓ガズナ遠征へ

という對應關係になる。兩王朝の間の勢力均衡狀態の背後にはこのような動きが存在したのである。

ところで本稿では觸れなかったが、兩王朝の間にはもう一つ重要な國境地帯であるグル地方がある。四千メートル級の山々が連なるクーヒ・バーバー山脈の中に位置するグル地方がイスラーム世界の一員となったのはスルタン・マフムード時代のことと考えられている⁴²。しかしながら四三二／一〇四〇年以降サンジャル時代に到るまでの同地の歴史についてはほとんど何も情報がない。一方國境地帯として同地を考えた場合、問題になるのはそこへ到るルートである。諸史料に見られるグルへの道は大別して、(一)ヘラートから Hari Rud 沿いに遡る [Ist:285]、(二)ブスト、ザミーン・ダーワルから山地に向かって北上 [ibid.:250; IH:423]、(三)ガズナからおそらく現在のウナイ峠を経由してクーヒ・バーバー山中に入る、の三つである。(一)は四一一／一〇二〇年にマスウードがヘラートからグル遠征を行なったときのルート [TB:137-43]。(二)は四〇五／一〇一四—一五年にマフムードが遠征したときのそれ [ibid.:136] である。(三)はマスウードがダンダーナカーンからガズナへ逃げ戻ったときにのみ現れ [ibid.:836-46, 851]、管見の限りではガズナ朝時代を通じてこのルートが何らかの軍事行動に利用されたという記録は見あたらない。これらから考えると、グルへの道の要衝はヘラートとブストであったと言うことになる。本文で述べた通り、この時期ヘラートはセルジューク朝の手に、ブストはガズナ朝の手にと、兩王朝ともにグルへの道を一本ずつ有していた。それにも拘らず、兩王朝を通じてこの時期グルに關して知られる軍事行動は、唯一ガズナのイブラーヒームが、内紛調停のために乞われて行なったグル派兵

のみである [TN i:332]。セルジューク側ではサンジャルがホラーサーンで覇権を確立するまでグルルに關する記録はなく、少なくとも大規模な軍事行動はなかったようである。峻険な山々が外部からの軍を拒んだのか、あるいはボズワースの言う如くグルルもやはりバッファーステートとなっていたことによるのか [Bosworth 1961:128]。いずれにせよこの時期グルル地方が享受していた對外的な安全が、次の時代のグルル朝の臺頭と無關係であつたとは思われないが、それについてはまだ別の機會に考えてみたい。

注

- (1) 本稿では「國境」あるいは「國境地帯」という語を用いるが、これは近代的な國境線を意味しない。もちろん自然的、地理的境界は存在したであろう（例えば本稿で述べるヒンドウークシュのような）が、原則として問題になるのは都市である。例えば本稿で「ブスト、スィースターン方面の國境」と言つた場合、筆者が想定しているのは、兩王朝各々の前線であつた、ブストとスィースターンの間の地域、あるいはその兩方をも含めた地域である。随分漠然としているように思われるかも知れないが、實際には廣大な漠野の何處でも移動できるというものでもなく、基本的には様々な施設（おもに水を得るための）が付屬した一定の交通ルート (maslik) が當時利用されていたと考えられるので、ある程度範圍を限つて考えることが出来る。
- (2) 本稿で使用する主な史料・文獻に關しては末尾に付した文獻表を参照されたい。
- (3) IA ix:483-84 にはマスウードがルッハジュからヘラートへ軍を送り、ヘラートを一時奪回した、との記事が、また RS:99-100 はマスウード自身がブスト、テギーナーバード道からホラーサーンに進軍したと述べるが、TB:ZA にはそのことは記されていない。
- (4) IB:141 による。この史料は十二世紀初め頃に書かれたものでセルジューク朝、ガズナ朝に關する貴重な情報を含むと言われる。尙、TN i:235 では戰場は "Darya-yi KHMAR" という場所であつたとされている。
- (5) IA x:580 によればチャグリと戦ひ撃退したのはアブド・アッラシード。
- (6) IA にはトゥググリの最後に關してインドにいたアミール Khirkhiz という人物が登場する。すなわち、トゥググリが王位篡奪後彼に協力を求め、ともにセルジュークを撃退してガズナ朝の舊領を回復しようとし、持ちかけるが、Khirkhiz は斷固拒絕し、ガズナにいる者達に手紙を書き、彼らが手をこまねいて見ていることを非難した。そして自らガズナに向かつたが、彼が到着する前にトゥググリは一團の者達に殺された、と。一方 HS, TN でトゥググリの立て役者となつてゐるのは Nushatekin という名のグラームである。このグラームが單身或は仲間と語らつてゐる日 (四四三・Dh. Q. 一〇五二・四 in HS) トゥググリを刺殺したと言う。Khirkhiz は登場しない。この Nushatekin の物語は JH:548-52 で見える。ひとり IB のみが Khirkhiz と Nushatekin の兩者の言及がなく [IB:142]。尙、Bosworth 1977: 41-47 參照。
- (7) IA x:584 によればアミール Khirkhiz の示唆によりファッルフザー

ドを選んだ。多くの者はイブラーヒムを望んだが彼が病氣であったためファッルフザードに決まったという。

- (8) IA x:584 によれば Khirkhiz が阻止した。セルジューク軍が何處を通ったかは不明。Hs:9b によればセルジューク軍はプストからきた。撃退したのは件の Nushetkin。

- (9) Hs:17a によればセルジューク軍を率いていたのはアルプ・アルスラン。

- (10) なお、TB:131 には、アブド・フッラシードの時代、Bu Sa'd, Abd al-Ghafar なる人物が、「ホラーサーンを領有していた有力なる者たち (muḥashamān) と條約、約定を結ぶため」使節として送られたとの記述があり、この時代にもセルジューク、ガズナ兩朝の間で何らかの條約締結の試みがなされたことが伺える。ただ、この使節派遣が何年の事かの記述はない。

- (11) IA x:5 によれば和議はイブラーヒム即位後のこと。Bosworth 1977:51-52 参照。

- (12) これ以上の戦いは互いに得る所なく消耗するのみだという認識からのことと言う [IA x:5]。また Hs:17a は「セビュクテギンの家とセルジュークの家は各々の王權に關して獨立しており、互いを占領する試みを捨てる。」と記している。

- (13) 例えば後世史料ではあるが、TA ii:32 参照。

- (14) IA によれば四九五／一〇一〇二年カラ・ハン朝と通じてサンジヤルを裏切った Kundughdi がサンジヤルに敗れてガズナのマスウード三世のもとへ逃れ仕えた。

- (15) ZA:204, n. 2. 尙、服部 1976:169-70 もこの點に觸れているが、服部氏はこれを『大唐西域記』の「護苾那」であろうとした。水谷 1971:373 も Beal をひいて「護苾那」を現オビアンにあてて。しかし「護苾那」=オビアンという説に對しては桑山氏が疑問を呈している [桑山 1987:264-65]。

- (16) 水谷 1971:43 はこれを "Darra-yi Gaz" (後注21参照) にあてて。ルートの記述はそれぞれ Ist:286, IH:457-58, Maq:346 にある。

- (17) Khulm 南東に "Pir Nakhchir" として現在もある。

- (18) 尙、TB:738-44 によれば四一九／一〇三八年、マスウードはやはり Ghuzak を越えて北行し、バグラーンから南下するワズィールの軍とアンダラーブ地方で合流しようと企圖した。

- (19) 服部 1976:169 はこれを "Ghurak" と考え、al-Biruni の Kitāb al-Jamahir fi Ma'rifa al-Jawāhir (ed. F. Krenkow, Hyderabad, 1936) p. 220 にある「バグラーンとバルワーンを結ぶ峠道 Ghurak であるとする。一方 Nazim 1971:29 はセビュクテギンとヒンドゥーシャー朝の王 Jaypāl が戦った地として「ガズナと Langhān の間の 丘 Ghuzak」をあげている。しかしこれが Ghuzak であれ Ghurak であれ、いったい今のどの峠にあたるのか、確かなところは分からない。現在の地圖にはあまりこの地名は見あたらないが、例えば Elphinstone 1969 に付された J. Macartney の地圖には「バルフの南に "Derra Guz" としてこの地名が記されている。

- (20) なお、一三九八年、サマルカンドからインドへ遠征を行ったティムールは「往路 Khavak 峠でヒンドゥークシュを越え、歸路は Shihar 峠を越えたという」[加藤 1968:22-25]。14世紀末にも二つのルートがヒンドゥークシュ越えのメインルートであったことを示していると考えられる。

- (21) 例えば桑山 1985:174 を見よ。また Foucher 1942-47: 217 n. 18 は特にこの地の「パンジュシール、ゴールバンド兩河地域をおさえる戦略的重要性を述べている。

- (22) TB:879-80 に據れば Alutash 敗北の原因はバグラーン地方の人々がチャグリ・ハグに通じたためであった。

- (23) Masson もかつての Hupyan はもっと廣大なものであっただろうと述べている [Masson 1842 3:161]。もし假にバルワーンを Jabal al-

Saraj) であると考えらるなら、現オビアンはパンジュシル、ゴールバンドを挟んでそれと向かいあう山端に位置していると言える。パルワンと對にして砦を構え、北方に對する「門」とするには恰好の場所のように見える(圖2参照)。その意味でマスウードが「パルワーン」HYBAN に向かえ。」と命じたのは示唆的である。

- (26) Bosworth 1977:10-11, 尙 IF:120-21 にもそれに關する記述がみられる。

- (27) 尙 Bosworth 1977:44 参照。

- (28) Marguart 1901:229, 237 の當該地についての記述を指している。

- (29) Adamec 1975 の付圖 I-17-B には、Doshi の東に「Eskar」という地名が見えるが、これがミノルスキーの言う「Jaskan」にあたるのだろうかは不明である。

- (30) ヘラートに關しては、いつ頃かは不明だがアルプ・アルスランの息子「ughanshah」が統治を任され、マリクシャー時代にもしばらくは引續きその任にあったと言う。Köymen 1968 参照。

- (31) Hs:34a に據れば、Gawurt の亂平定後アヤーズが病死し、マリクシャーはテキシニにバルフ、トハリスターンを委ねたと言う。

- (32) Bosworth 1968a:136 では「明らかに Ertaş b. Ibrahim Inal の子孫」と記されているが、筆者はその根據を知り得なかった。

- (33) 後期ガズナ朝時代、特にイブラーヒム・マスウード三世時代のインド方面での活動については Bosworth 1977:61-68, 84-86 にまとめられている。

- (34) プスト、ルッハジュをスイースターンに含めるのは、例えば Yaq:281, IR:105, Isf:245. 獨立した地域と見なすのは Ikh:50, Maq:305.

- (35) Schlumberger 1978:22, 24, 66 に據れば、南宮には二度の火災の痕があり、その最初はグルル朝の 'Alā' al-Dīn Jahānsūz による破壊の際(五四五/一一五〇頃)のものと考えられている。これが正しければ、少なくともそれ以前は宮殿自體が大きな破壊を被ることはなかった。

たと言うことになる。一方バーザールの方は、Gardīn により、マフムード治世の後、バフラームシャー時代に到るまで放棄されていたのではないかとの假説が、貨幣をもとにして提示されている [Gardīn 1963:168-69]。前掲の表1にある通り、この間セルジュークによるプストとその周邊の略奪が何度かなされているのでこの區域が破壊を被った可能性は十分にあるように思われる。

- (36) 後の 'Alā' al-Dīn Jahānsūz がガズナ征服の際にとつた道はグル↓プスト→ガズナであった [TN:341]。

- (37) ガズナ朝にとってプストと並ぶ南方の要衝であったテギーナーバードの重要性については、次のような文章に明白に示されている。

「テギーナーバードはそこを失ったが故にセビュクテギンの一族が没落したところの地である。」 [TN:396]

- (38) スイースターンの内情の複雑さを現出した一因は同地のアイヤールの存在にあると言えよう。清水 1984 を参照されたい。

- (39) 尙 Bosworth 1977:28-29 を参照。

- (40) トググリル・ベグ、チャグリ・ベグ、ムーサーの三者の間でダンダーナカーン後定められた領地分割についての取り決めのことで、チャグリは北方メルヴを中心としてホラーサーンの大半を、ムーサーはヘラートから南方スイースターン方面を割り當てられた [Hs:11a, SJ:18; RS:104]。見方をかえればこれは、いわゆるイラン北道とイラン南道に各々當たることになり、きわめて興味深い。

- (41) 後にサンジャルがガズナ遠征を行なった際、セルジューク軍がスイースターンを経ずにヘラートから直接プストに到り、しかもそこでスイースターン軍が合流している [LA x:504-5] と言う事實は、プスト、スイースターン間ではなく、おそらくはプスト、ヘラート間という広い地域の方が國境として問題となっていたことを反映しているのかもしれない。

- (42) マフムード時代のグルル征服については Bosworth 1961:125-28;

Nāzim 1971:70-73 參照。

《文獻叢》

* 1 文獻叢

[FB]

al-Balādhri, *Kitāb Futūḥ al-Buldān*, ed. Š. Munajjid, Cairo, 1956.

[H'A]

anon., *Ḥudūd al-'Ālam*, ed. M. Stūda, Tehran, 1340AH.

[Hs]

Šadr al-Dīn 'Alī al-Ḥusaynī, *Ахбур ад-Даулат ас-Селбжѣкуйѣа*,
изд. З.М.Бунятов, Москва, 1980.

[IA]

Ibn al-Athīr, *al-Kāmil fī al-Ta'rīkh* (13vols.), ed. C.J. Tornberg,
Beirut, 1982.

[IB]

Ibn Bābā al-Qāshānī, *Kitāb Ra's Māl al-Nadīm*, Eng. tr. by C.E.
Bosworth in Bosworth 1977:132-55.

[IF]

Ibn Funduq, *Ta'rīkh-i Bayhaq*, ed. Aḥmad Bahmanyār, Tehran,
1938.

[IH]

Ibn Ḥawqal, *Kitāb Šurat al-'Arḍ*, ed. J.H. Kramers, BGA 2, Leiden,
1967.

[IKh]

Ibn Khurdādhbih, *Kitāb al-Masālik wa al-Mamālik*, ed. M.J. De
Goeje, BGA 6, Leiden, 1967.

[IR]

Ibn Rusta, *Kitāb A'lāq al-Nafisa*, ed. M.J. De Goeje, BGA 7, Lei-

den, 1967.

[Ist]

al-Iṣṭakhri, *Kitāb al-Masālik wa al-Mamālik*, ed. M.J. De Goeje,
BGA 1, Leiden, 1967.

[JH]

Sayyid al-Dīn Muḥammad 'Awfī, *Jawāmi' al-Ḥikāyāt wa Lawāmi'
al-Riwāyāt*, ed. Amīr Bānū Muṣaffā, Tehran, 1352AH

[Maq]

al-Maqdisi, *Aḥsan al-Taqāsīm fī Ma'rifat al-Aqālīm*, ed. M.J. De
Goeje, BGA 3, Leiden, 1967.

[RS]

Muḥammad b. 'Alī b. Sulaymān al-Rāwandī, *Raḥat al-Šudūr wa
Āyat al-Surūr*, ed. M. Iqbal, Tehran, 1364AH.

[Slj]

Zahīr al-Dīn Nīshāpūrī, *Saljūq-nāma*, Tehran, 1964.

[TA]

Nizām al-Dīn Aḥmad, *Ṭabaqāt-i Akbarī* (3 vols.), ed. B. De. &
M.H. Husain, Calcutta, 1913-14.

[TB]

Abū al-Faql al-Bayhaqī, *Ta'rīkh-i Bayhaqī*, ed. 'A.A. Fayyāḍ, Mash-
had, 1977.

[TN]

Minhāj al-Dīn Jūzjānī, *Ṭabaqāt-i Nāsirī* (2vols.) ed. 'A.H. Ḥabībī,
Kabul, 1963.

[TS]

anon., *Ta'rīkh-i Sistān*, ed. Bahār, Tehran, 1935.

[Yaq]

al-Ya'qūbī, *Kitāb al-Buldān*, ed. M.J. De Goeje, BGA7, Leiden, 1967.

Bosworth, Cambridge

[水谷 1971]

水谷眞成譯『大唐西域記』平凡社

[Murgotten 1969]

F.C. Murgotten, *The Origins of the Islamic State* vol. 2, New York

[Nazim 1971]

M. Nazim, *The Life and Times of Sultan Mahmūd of Ghazna*, New

Delhi

[Schlumberger 1978]

D. Schlumberger, *Lashkari Bazar, LA L'architecture*, Paris

[清水 1984]

清水宏祐「スーースターンのフィヤール——『Tarikh-i Sistan』の記述を中心として」『『第三世界』の社會變動と地域研究』東京外國語大學海外事情研究所。

(本研究は昭和六三年度文部省科學研究補助費(獎勵研究A)による研究成果の一部である。)